

(様式6-2)

## 研究成果概要

所属学校名 伊勢市立小俣中学校

職・名前 教諭 大屋 真一

- 1 事業の名称 一般内地留学
- 2 留学先の名称 大阪教育大学
- 3 研究主題

「同和教育をはじめとしたこれまでの人権教育実践と人権感覚あふれた学校づくりに向けた人権尊重の意識と実践力を養う組織的指導とは」

#### 4 研究成果の概要

大学では、森先生の「部落問題概論」・「ダイバーシティと人権」や土田光子先生の「学校の役割と経営」などの授業を中心に、これまでの同和教育の実践やこれからの新しい人権教育について学ぶことができた。自分自身が無自覚に持っている特権に気付く授業、その特権をどう活用していくのかを考えた。現代の部落問題について知る授業など生徒に教えるためだけでなく、教師が子どもを見る目のあり方について同和教育の歴史から学ぶことができた。部落史ばかり教えるのではなく、これからの展望を考えることができる学習へとつなげていく学習が必要である。

また、授業においてたくさんのゲスト講師と出会うことができた。出会った人からの話と「自分自身を重ねる」、「くぐらすこと」の大切さを学んだ。

LGBTについて、授業やサークル活動を通して当事者と出会うことで、気付かされることがたくさんあった。教師の無自覚な言動によって傷ついてしまっている子どもがいること、カミングアウトできる環境・信頼関係をどのように作っていくのかなどを学んだ。また、LGBTの当事者であり三重県内を中心に講演されている山口颯一さんにつながることができ、今後、三重県の現場で教員同士がさらにLGBTについて考えることのできる教材づくりを進めていきたいと考えている。生徒一人ひとりが自分らしくふるまうことのできる、多様性を認め合うことのできる学校づくりについて学ぶことができた。

9月には大阪府松原市立松原第三中学校で1か月現場研修をさせていただいた。ここでは、円滑な教員間の連携、どの生徒に対しても一貫した生徒指導、学力向上に向けた取り組み、班を活用した集団づくりなど学ぶことができた。生徒の実態に応じた人権教育学習に向けた教師集団の動きなど、研究主題につながる学習となった。

教師自らがまず、その差別と自分を向き合わせることで、どのようなことを生徒に伝え、自分には何ができるだろうかと自分の中で整理した上で、全教職員が一体となった人権教育の充実をはかることが必要である。

今回の内地留学の期間中に人権課題について自分におきかえて考える機会がたくさんあった。ある先生の言葉であるが、「一人で見える範囲に限界がある。しかし、仲間が増えることで視野が広がる。」目の前にいる子ども一人ひとりが希望を持てる、安心・安全が保障された学校・社会でなければいけない。つながりを大切にしていける人権教育を進めることは、「一人ひとりの個性や強みを生かせる社会」を創ることにつながっていくと確信した。

誰もがこぼれることのない社会の実現に向けて、今回の学びを広げていき、能動的に人権教育を進める仲間をこれからもさらに増やしていきたいと思える1年間であった。